

伊野川から忠別川までの地名⑥

前回は、神居町台場の「台場」の由来を紹介した。草原の中に、三方を鑿つたような高台があったところから、「台場ヶ原」と命名されたという。明治二十三年九月二十日の旭川村誕生以前の和名であった。

掲載地図(現行五万地形図を八七%縮小)の「台場ヶ原(ヌプ)」の位置は、明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』と同じ位置に記入したものである。「台場ヶ原」が、アイヌ語地名では、ヌプ(nup)野、野原)であったが、石狩川右岸の伊納駅のある春日地区も、同じようにヌプ(nup)野、野原)であった。安政四年(一八五七年)に松浦武四郎は、写真(1)の野帳(フィールドノート)『已第二番』に、次のように記録した。

①トソ子ホク

②ヌツハヨマナイ
③エタンヘツ 左

③のエタンヘツ(現・江丹別川)は、「左(註)上流に向かって左岸」と記しているが、①トソ子ホク、②ヌツハヨマナイは、左岸・右岸の記載がなかった。それが、報文日誌の「再篙石狩日誌」によって、②ヌツハヨマナイは、次のように、石狩川の上流に向かい左岸にあることが判明する。

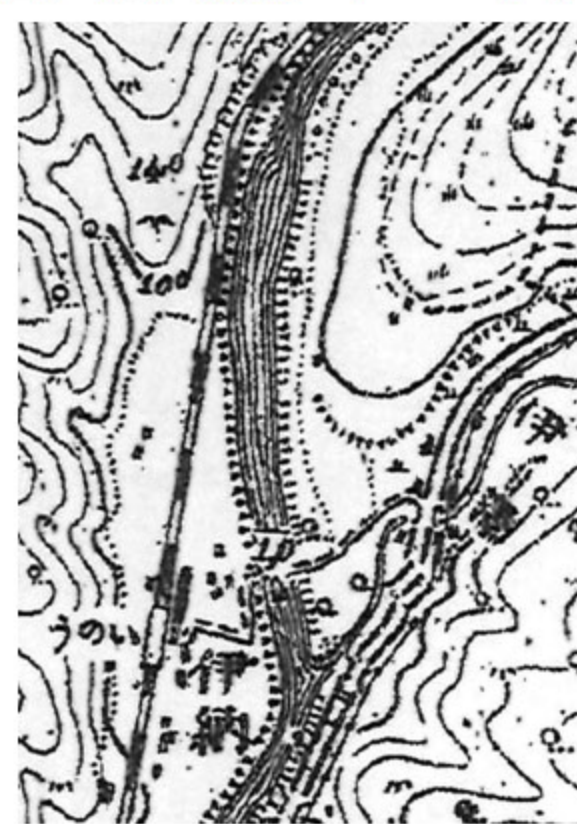
ヌツハヨマナイ

此処左の方小川有。兩岸平地に成たり。樹木柳・赤楊にして下は箸多し。少し行く(エタンベツ)左の方川有。

ヌプパオマナイ(nup-pa-oma-nay)野の上手を入れて行く・沢)は、実際の発音は、ヌツパオマナイで、松浦武四郎の記録したヌツハヨマナイとなる。

掲載地
図(2)の

「渡船位置図」は、明治四十三年改版の『北海道仮製五



(2) 渡船位置図

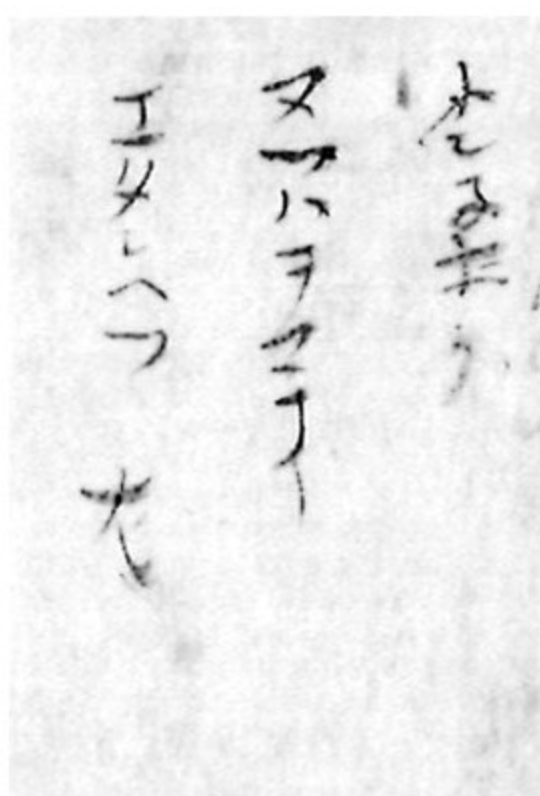
万分一図』に記載された、伊納から神居村伊野澤への「渡船位置図」である。この渡船は、明治三十四年に設置された官設渡船であった。

この渡船について、大正三年発行の『鷹栖村史』では、次のように記述している。

明治三十四年八月、字のつばまない、神居村伊納(註)伊野澤のこと)間ニ、官設渡船場ヲ設置シ、坂利七衛之レガ取扱人ヲ命ス

これが、伊納の渡船についての公式記録である。『鷹栖村史』では、アイヌ語地名は、右の「のつばまない」のように、「平仮名ゴシック体」で表記するのが基本形式である。

(1) 野帳『已第二番』



従って、「のつばまない」は、アイヌ語地名の「ヌツパオマナイ」の和人式表記であることが分かる。すなわち、明治三十四年当時、伊納駅周辺のヌプ(nup)野、野原)は、明治二十五年以降、鷹栖村字の「つばまない」と呼称され、大正十三年以降は、江丹別村に所属し、昭和十六年に「春日」の字名になり、昭和三十年に旭川市に編入合併し、旭川市江丹別町春日になったのである。

さて、問題のヌツパオマナイ(nup-pa-oma-nay)野の上手を入れて行く・沢)は、掲載地図の位置の川と比定した。この沢は、国土地理院の五万地形図の昭和二十八年、四十四年、五十年発行版では、「熊ノ沢」、平成十八年発行の二万五千地形図では、「木津の沢川」となっている。

「木津の沢川」は、昭和五十年発行の『北海道河川一覽』から、河川番号「一九二二」として登録されている。川名の「木津」の由来は、大正六年に、旭川市で初めて自家用自動車を所有した齒科医の木津友三氏の所有の山と別荘があったことによるという。

また、この川の右岸に広がる美林は、旭川商業高等学校の学校林で、北海道の高校の学校林では、最も古い歴史のある学校林である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

117

高橋 基



現行5万地形図